

ウナギとアナゴを中心とした島根半島および隠岐島における生物多様性調査

生物科学科 准教授

秋吉 英雄

研究成果の概要

島根県のニホンウナギ幼魚であるシラスウナギの生態系はほとんど明らかにされておらず、県内の 2, 3 の河川でのみ遡上が確認されている。マアナゴのレプトセファルス幼生および幼体に関する知見は全く無い状態である。島根県内の近海にはヌタウナギが多数生息するが、産卵場所をはじめとした生態系は未解明である。ニホンウナギ、マアナゴ、ヌタウナギの生態系調査を島根半島、神西湖河川、隠岐島島後・西ノ島で 4 月から 12 月にかけて行った。

1. シラスウナギ遡上調査は、島根県水産技術センターとの共同調査により実施した。河口岸部の河面に水中ライトを照射 (図 1)、集まってくるシラスウナギを調べた (図 2)。昨年度 3 月までの調査と比較し河川への遡上は 4 月中旬をピークとすることが明らかとなった。太平洋側の河川では、一般に 11 月に始まり 12 月がピークであるのに対し、日本海側の河川は対馬暖流の潮勢および蛇行の状況により接岸時期が遅くなる可能性が示唆された。隠岐島島後および西ノ島においては遡上時期の基礎的調査を主要河川で実施し、遡上環境に合致した東南側の 3 河川において、流量、底質等の物理的要因の精査を行った。隠岐島の各河川は急傾斜の河川が多いことから砂防堤の建設が多く、河川上流部には少なく、河口近くの汽水域のわんど等に親魚が多数生息していた。
2. アナゴの季節的出現率を島根半島および隠岐島で籠罟における捕獲調査を実施、卵巣及び精巣の成熟状態を解剖及び組織学的に検査した。アナゴ幼魚を 8 月に水深 50m 砂泥底より採取した。
3. ヌタウナギの季節性出現率及び卵巣・精巣の成熟度調査を隠岐島島後加茂、島前西ノ島地区で行い解剖及び組織学的に精査した。ヌタウナギは隠岐島地区では水深 10m 以深の砂泥地に生息し、産卵期は卵巣の発達状況から推察して 7 月前後と予想された。



社会への貢献・その他

1. 島根産ウナギとマアナゴのブランド化に向けて、昨年に引き続き内水面漁場管理委員会において各組合長に説明し今後の協力を依頼するとともに。島根県水産課に県内ウナギとアナゴの資料提供を依頼し、今後も水産課および水産技術センターとの共同で検討・研究する事を課題とした。COC 大交流会にて発表し、汽水域産のウナギの重要性を発表した(図 3)。
2. ウナギとアナゴのブランド化は漁業者・島根県・大学の三者構成が必要であり、シラスウナギ、マアナゴ幼生の生態系を明らかにすることで産業化の後押しが可能となる旨の説明を行っている。

